

発想の転換＝可能性に富む日本農業。田園都市国家目指して

「失われた10年」を経過しても、我が国は依然として低迷状態を抜け出せずにいる。企業業績は好転しているとはいえ、景気回復の実感はない。今年は長梅雨による低温・日照不足が続き、農産物への多大の被害発生は必至の情勢である。そしてWTO交渉は大詰め。アメリカとEUの妥協案も我が国にとってはきわめて厳しいものとなった。このように我が国経済は勿論のこと、とりわけ農業にとってアゲインストの風は厳しい。こうした中、日本農業の将来についての悲観論は根強いが、最近のさまざまな動向からは日本農業の持つ潜在力を強く感じさせられもするのである。

例えば、これまで安売り競争をテコにして急成長を遂げてきたM社を筆頭とする外食ハンバーガー業界も、このところ売上高は減少し、経営も苦境に追い込まれるなど限界状態にあり、一転して素材や品質にこだわっての脱低価格志向を強め始めている。「小さい時からハンバーグを食べさせて、日本人の味覚まで変えてみせる」と豪語していたオーナー経営者も引退を余儀なくされてしまった。イタリアではスローフード運動というかたちで、M社に象徴されるファーストフードの進出に対抗してきたわけであるが、我が国では消費者のバランス感覚ゆえ、というべきか、安いだけの一律の味にはもう嫌気がさして、今度は少々高くても、こだわりの商品を求めつつある。気まぐれな消費者も振り子の針が戻るように、真の豊かさ、豊かな暮らしというものを少しずつ認識し始めているように感じられなくもない。

ところで我が国の国土は南北に長く、かつ起伏が激しく、気候は太平洋側と日本海側とで大きく相異するとともに、降雨量が多いなど、世界でもまれに見る多様で変化に富んだ自然条件と、豊富な生態系を有している。こうした自然・風土を反映して多様な農産物、地域特産物が生産されるとともに、各地で郷土色豊かな食文化が育まれ、景観にも恵まれている。また、職人気質に長けた生産者の持つ技術水準は世界でもトップクラスの水準にあり、農産物の品質はきわめて高い。そして何よりも所得水準が高く、価格以上に品質や安全性を優先する消費者が多数存在すると同時に、狭小な国土と発達した交通網により都市と農村との時間距離はきわめて短い。これらは新鮮で多様な農産物の供給を可能にするだけでなく、生産者と消費者の顔の見える関係の構築を可能にするとともに、都市と農村との交流をも可能にするものであって、輸入農産物による代替はむしろ困難である。大規模化による低コスト生産を追いかける限りは条件不利な我が国農業も、こだわりをもつ消費者需要に対応しての少量多品種で高品質型の生産を志向していく場合には、むしろ好条件に恵まれているとみることもできるのであって、消費者との連携強化、販売力確保がポイントとなる。

これら我が国農業の持つ多くのアドバンテージを生かした取組みをみせる農業者が、少ないながらも着実に増加している。こうした動きを加速させていくことが対WTO戦略の基本であり、楽観は許されないとは言え、日本農業の将来を悲観ばかりしている必要もない。我が国を田園都市国家として、生産者と消費者による多様なコミュニケーションを軸に再編していくことが求められる。

（農林中金総合研究所 常務取締役 蔦谷栄一）